

ドクター 小倉ただお
サウス オーク病院
400サン ライズ ハイウェイ
アミティヴィル ニューヨーク 11701

1982年9月29日

親愛なる小倉先生

ミスター ジョージ ザウナス (じょうち) の勧めにより、1979年、禅スタデイ ソサイエティの理事会が目されることになった事件に関する二つの公文書のゼロックス コピーを貴方にお送りします。第三の同封文書は、私が嶋野宛に書き、結局投函せずにあった手紙のコピーです。この第三の文書を貴方にお見せする理由は、先日これを再読した所—誰か他の人の書いた文書のように—私自身気付いた事は1979年当時の何日か、何週間かを非常な説得力をもって再現している事です...この何日か、何週間かの間に起きた多くの意見、様々な想い、実情、判断、分析そして悲しみ—是等全て—その類似性は1975年の事件を思わせるものであり、又現在1982年の事件も同様だと思います。

貴方が1979年の事件をどの程度ご存知なのか分かりませんので、ここで少し反復説明します。

1975年以後、嶋野氏が多くの僧伽メンバーの女性達と性交渉を持った後、これらの女性達、又他の女性達は禅スタデイ ソサイエティを去りましたが、彼のこれらの女性達に対する事後処理も含めて事件が公表化されました。1975年に、1979年に、また1982年に去った人びとは皆同じ理由で去ったのです。去らずに残った女性達の間でも同様の発言がありました。理由は恐怖、地位、怒り、困惑...各々の、全ての女性達の想いは1975年の場合、1979年の場合、1982年の場合皆同じでした。違いはこの想いを経験した女性です。現在も、1975年、1979年の場合も、寺に残った者も寺を去った者も皆共通して仏教徒としての何らかの調停を期待していました—人間としての問題はさておき—必然的に過ちの告白にはその健全性が問題になります。1975年、1979年、そして現在の事件において多くの思いやりのある健全化への勧めとその招待が嶋野氏の面前に提示されました。1975年のケースと1979年のケースでは効を奏しませんでした。1975年、黙認を由とせぬ人びとは去り、沈黙を決め込んだ人びとは残りました。争議の解決はなかったけれども、塵埃は治まりました。

1979年、ピーター カフマン (こうぜん) という名の僧がある時大菩薩禅堂の公衆の戸棚を片付けていた時、偶然、■■■■によって書かれた同封の日記を発見しました。ニューヨーク禅堂の僧デイヴィッド ボガード (ぶんゆ) と共に、彼は不手際にも日記の内容に関して理事会に相談を持ちかけました。会長の、こりん シルヴァン ブッシュの手紙によれば、“私達の栄道老師に対する信頼、彼の僧伽指導権は揺るぎないものである”との彼に対する再確認で返答されています。彼が手紙で全く触れていないことは彼女の日記の内容、趣旨とこれを考慮しようと言う意思です。時が経ちこの論争が激化しました。こうぜんとぶんゆは第二の手紙を理事会へ送りました。一人の女性、■■■■が、■■■■宛に公開状を送りました。■■■■の手紙は(同封第二の文書)多分私が見た文書のうちで最も私の心を打った内容で、彼女の嶋野氏との関係のあらましをよく語っています。理事会も日記と、■■■■の手紙両方のコピーを受け取っています。

間もなく一部の理事会メンバーは、煽動策に出ました。私は推量するのですが、彼らは流言策を試みました。第一は、■■■■は精神不安定である(これは事実で嶋野氏の好みの女は皆精神的にか弱い女に限られたようである)第二に、彼女の日記の特殊表現にも見えるのですが、これは彼女の夢(ユング系精神分析学者により論議されている)の記録です。

これらの中で—1975年に関して言えば(1962年も私の知っている限り)—嶋野氏が過去に行なった業績に対する表彰が行なわれました。私も又、1979年の時点で既にほぼ五年近く彼の弟子であり、理事会へ手紙を送り、こうぜん、ぶんゆの手紙と、■■■■の手紙の実態を公開協議するよう求

めました。この要求とそれに引き続く後の騒動は非常に激しいもので、私自身の未投函の手紙にある概要をさらに上回る熱烈なものでした。是等を経て、しばらく後、前回と同様再び塵埃は治まり、批判者はいなくなりました。

当今の私自身の想いは、セックスに注目の焦点を置いている事が残念だと言う事です。嶋野氏の色情狂の症状は中心の問題ではなく、むしろ徴候として印象を受けます。中心事項は所謂“病”と呼ぶもので私が“権力者の傲慢”と名付けずにはおれないものです。ひとりの人間が権力の水準でものを見る時、そこには友人は存在せず、唯組合員のひとり、又はひきがえるのように諂う者しかありません。僧堂の境界で見られる自己憐憫の面々も、この権力に対する心理として私の心を突き刺します。1974年私が初めてニューヨーク禅堂へ来て以来、誰一人として、嶋野と平和な気持ちを抱き合って寺を去った者はいません。同様にして、“高尚なる沈黙”と(非常な誤りであるが)所謂名誉の意味です。最も典型的に私の心に浮かぶ事は、決して過ちを認めない事(たとえ表面上の技巧としてさえ)と、非常に高い地位にある権威筋と自分とを同等に置きたがる事で、多分彼自身そう信じているに違いありません。悪意ではなく、私は彼をリチャードニクソンと同格に置きます。

とにかく、私はおそらく、もはや分析にはそれほど興味を持っておりません。動機の源を探り、今私は平和な気持ちです、これは主題から離れてしましますが。私にとって問題は、1.行動、そして2.反動で、私に出来る限りの説明は知的でも感情的でもありません。反動は常に“否”です。反動に基付いて、私達が直面して来た、あまりに多くの重荷の経験により私も又ニューヨーク禅堂を去りました...深い悔いと共に、しかし私より以前に去った人びとよりも深いものであったかどうか。

最後に、私が心より望む事、貴方がニューヨーク禅堂に捧げた尽力が効を奏して欲しいと、私に言わせて下さいますか? 貴方は非常に情け深い方です。僧伽の一員として感謝し、成功を祈ります。

敬具

アダム フィッシャー
164東88番街
ニューヨーク NY 10028